

主筆 牧野富太郎

## 植物研究雜誌

第五卷 第一號

(通卷第三十七號)

昭和三年一月三十一日  
東京津村研究所發行

## ○本誌第五卷々頭ノ辭並ニ私ニ關スル誤報ヲ匡ス

牧野富太郎

此植物研究雜誌主筆ノ私トシテ先ヅ第一ニ讀者諸君ニ御詫ビヲ申シ上ゲナケレバナラス事ハ昨年發行ノ本誌ガ豫定通り十二號冊ヲ出版シ得ズ止ムヲ得ズ六、七、八、九、十及ビ十一ノ六ヶ月ヲ休刊トシ十二月發行ノ第六號ヲ以テ第四卷ヲ完結サセネバナライ様ニナツタ事デアル、此讀者諸君ノ期待ニ辜負シタ事ハ其レハ私ガ昨年七月以降十二月ノ始メ頃マデ我が健康ノ優レタルニ信カセ植物學ノ爲メニ近遠ノ諸州ニ旅行シテ東京ニ居ル事ガ頗ル尠ナク從テ其編輯ガ思フ様ニ出來ナカッタカラデアル、其處デ從來ノ通りデハ私モ多クノ時間ヲ費スシ且ツ進行モ遲滯シテ自然發行モ後ル、事トナルノデ本年ヨリハ圖ゴトヲ改メ其編輯モ其校正等モ主トシテ知人友人ガ手傳ヒ(是レマデハ他人ノ原稿ノ修補、淨書、挿圖ノ撰定及ビ製版ノ手配リ、編輯、校正、印刷所ヘノ指圖並ニ往來等一切ノ事ヲ私ノ手一ツデ爲シテ居ッタガ)クル、事トナツタノデ是レカラハ順ヨク月刊ノ實ヲ舉グル事ガ出來ヤウト想フ、ソシテ相變ラズ津村順天堂主人重舍君、嗣良平君、並ニ其他ノ知人友人ハ私ノ爲メニ親切ニ本誌ヲ後援シ下サルノデ私ハ之レニ對シ常ニ深キ感謝ノ意ヲ表シ居ルノデアル

然ルニ此植物研究雜誌ノ立チ行クト否ラザルトハ一ニ購讀者多寡ノ如何ニヨリテ決セラル、ノデ私ハ本誌存續ノ爲メニ今一倍ノ購讀者ヲ得タイト祈念スル、幸ニ四方ノ諸賢斯學ノ爲メ聊カ力ヲ效サントスル私等ノ微衷ヲ憐察セラレ本誌ヲ御知人間ニ御推奨下サレ本誌ノ永ク續カン事ニ御同情ヲ賜ハラシテ事ヲ偏ヘニ惓願スル次第デ



ル書籍並ニ物品ヲ陳列シテ來會者ノ觀覽ニ供シタ、午後一時半ニ開會シ司會者松村松年博士ハ開會ノ辭、宮部金吾博士ハ式辭、伊藤誠哉博士ハマキシモウキツチ氏傳、私ハ前述ノ通り追懷談、伊藤篤太郎博士(不參)ハ露國植物學者マキシモウキツチ氏ヲ想フ(代讀)、白井光太郎博士(不參)ハカール、ヨハン、マキシモウキツチ氏誕辰百年記念會贊同ノ辭(代讀)、館脇操學士ハマ氏東亞植物分類ニ對スル貢獻、佐藤昌介博士ハ祝辭、半澤洵博士ハ祝電披露、松村松年博士ハ閉會ノ辭ヲ述ベラレ會ハ首尾ヨク閉會セラレタ  
私ノ右札幌滞在中偶然十一月二十五日發行ノ同地新聞『北海タイムス』ニ左ノ記事ガ載ツテ居ルヲ見タ

## 東大の牧野氏 追だしの陰謀

ヅボラな性格が禍ひ  
問題は更に紛糾する

【東京電話】

イヤだといふのを周囲の友人仲間から無理強ひに押付けられ二十年前の研究論文を出して

苦も

無く博士になつた例の隠れたる植物學者牧野富太郎氏は東大の助手講師を勤めてから約三十餘年

其間數十種に達する新植物を發見して植物學界に對して多くの貢獻を與へて居るが兎角ズボラな氏の性格が禍ひを爲して學校へ出る事は二ヶ月に一度位學生や教授に迷惑を懸る事は一度や二度ならず家庭的にも

余り

面白くない噂があるので理學部の前部長五島博士を始め數教授が秘に氏を追出さんと陰謀を巡らし辭職を強要したと傳へられて居るが之に對して植物學教授の早田、柴田、中井等の諸博士は猛烈に反對し

て居る爲問題は更に渦卷く模様である右に就き某博士は語る

『假令多少の失策はあるとしても斯る世界的學器を大學から離す事は非常な損失である學生は勿論植物の

諸教授も氏を生字引として教を受けて居る大學當局は先づ氏を追出す前に三十年間萬年講師として氏を遇するに七十餘圓しか與へて居らぬ事實を充分考へ置く必要があらう』

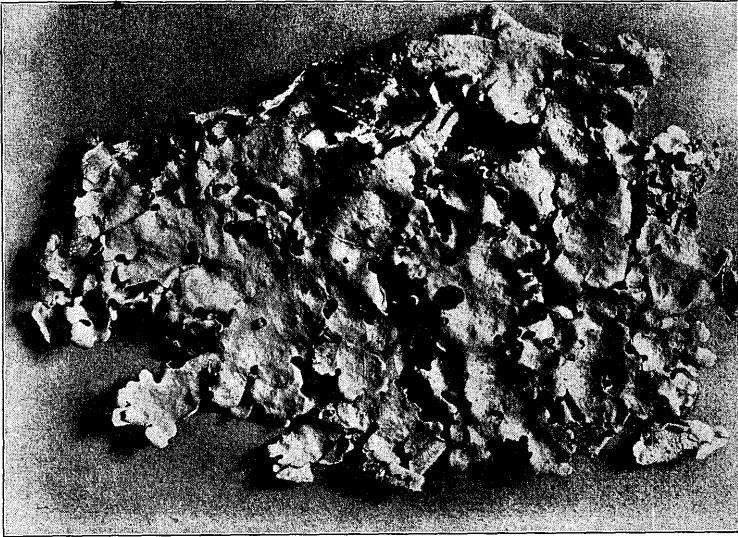
私ハ此記事ヲ熟讀シタ時其行文ガ餘リニ整然トシテ居ルノヲ見ルバカリデナク多少領カル、廉ガナイデモナイノデ多分之レハ事實アツタ事デアラウト想像シテ見タガ然シ尙半信半疑ノ間ニ迷フテ居タ、其疑ヒノ最モ主ナル點ハ五島(清太郎)博士ガ此記事ニアルヤウナ事ヲ爲タトハドウシテモ受取レナイ事デアツタ何トナレバ五島先生ハ從來カラ私ニ對シテハ人一倍ノ溫カキ同情ヲ持ッテ居ラレタ方デアルカラ同先生ガ主トナツテ私ヲ大學カラ追出スト云フ陰謀ヲ廻ラス事ハ萬々アリ得ベカラザル事ト思フタカラデアル、然シ植物ノ教室デハ目下ノ處動物ノ教室ニ比スレバ職員ガ多イカラ或ハ其權衡ヲ整ヘル爲メニ現在教授二名ノ分類學者ノ外ノ分類學者ヲ一人減ラスト云フ事ハ或ハアリ得ベキヤウナ事デモアルノデ若シヤサウシタ經緯<sup>イキザツ</sup>デモアリハシナカッタカトモ邪推シテ見タ(ガ之レハ中ツテ居ナカッタ)、兎ニ角歸京シテ見レバ委細ガ判ルガ然シ亦私トシテモ實ハ隨分永年教室ニ居ルノデアルカラ最早ヤ新陳代謝デ追ヒ出サレルノガ事實カモ知レンガサウナラサウシテ見ルガヨイ其場合ニ臨メバ更ニ一段ノ活躍ヲ大學外デ試ミルデアラウト澄シツ、「長く通した我儘氣儘最早や年貢の納め時」ト負惜ミノ様ニ聞エル都々逸ヲ口吟ンデモ見タ

札幌カラノ歸途採集シタイ植物ガアツタノデ盛岡ト仙臺トニ寄ツテ同地諸君ノ好意ニ浴シ數日ヲ費シタ、仙臺ニ滞在中上述新聞ノ記事ハ全ク根モナイ事デアツタト云フ東京カラノ通信ヲ傳聞シタ、ソシテ愈ヨ十二月四日ニ歸宅シ尙親シク各方面デ聽テ見レバ是レハ亦何タル事ゾ新聞ニアツタ様ナ事ハ全然架空ノ事デ何ノ根據モナイ一時ノ幻影蜃氣樓ノ如キモノデアツタ事ガ分ツテ呆氣ニ取ラレタ、又大學デモ此無根ノ記事ニハ頗ル迷惑ヲ感じテ居ル様子ダト聞タ(實ハ若シ之レガ本當デアツタナラカウモシヨウア、モシヨウト早クモ胸ニ計畫ヲ建テ、居タ事ガ外レタノデ遽カニ氣拔ケガシテシマッタ)ソシテ其記事ハ東京デハ『讀賣新聞』ニ出テ居ッタ事

ヲ見タ(前ニ掲ゲタ寫眞ヲ見ヨ)、然シソレニシテモソレナラ何故ニコンナ無根ノ記事ヲ突然世ニ出シタカ又誰レガ其捏造記事ノたねヲ新聞社ニ供給シタカ其レガ今以テ明白デナクタバ各人ガ色々ノ筋道ヲ辿ッテボンヤリ其邊ヲ揣摩臆測シテ居ルニ過ギナイ様デアル「遠くより望めば煙立ちしかど近づき見れば火元分らず」コレハ逸早く消防隊ガ驅ケ付ケテ火ヲ消シタノデハ決シテナイ

前ニモ述ベタ様ニ五島清太郎先生ハ私ニ對シテ微塵モ敵意ヲ持タレル方デハ決シテナイノデ此新聞紙ノ記事ノ様ナ事ハアリヤウハズガナイ即チ全然事實ガ謬ラレテ居ル、況テ先生ハ其歲ノ六月九日ニ東京ヲ出發シテ歐洲ヘ出張シ十一月六日ニ歸朝セラレ歸朝後此新聞記事ノ出デシ時分後マデハマダ一回モ教授會ヘ出席セラレタ事ハ無いノデコンナ議ニ預ラレシ事ハ前後ヲ通ジテ一度モ無いノガ事實デアル、今假リニ當時教授會デ其議ガアツタトシテモ出席セラレヌ五島先生ガ之レニ携ハル理由ガナイ、先生ハ全ク知ラヌ事デアルニ拘ハラズアノ記事ニヨリ先生ハ世間ノ誤解ヲ受ケ大變ニ迷惑シテ居ラル、事ト推察スルノデ私ハ同先生ノ爲メニ此處ニ特筆大書シテ其冤ヲ雪ギタイト思フ、誰レカ知ラナイガ若シモ五島先生ヲ中傷センガ爲メニコンナ虛構ナ記事ヲ故ラニ造ツタトスレバ其罪ヤ誠ニ深クツマラヌいたづらヲシタモノデアル

新聞記事中ニアルずぼらニ就テ一言スル、負ケ嫌ヒデ言フノデヤナイガ私ノずぼらハ質ノ惡ルイずぼらデハナイ(ハ、ハ、ハ、)一方デずぼらト見エル時ハ必ズ一方デ精勵シテ持前ノ凝リ性ヲ發揮シテ居ル時デアル丁度天秤ノ様ナモノデ一方ノ下ガツタ時ハ必ズ一方ガ上ガツテ居ル其真相ヲ洞見スル明ガナク無闇ニ私ヲずぼらナ人間ト速斷シテ貶ナシツケルノハ其一斑ヲ見テ全豹ヲ知ラザル皮相ノ觀察デアルト自分ノ事ヲ自分デ辯護スルノハ馬鹿、阿呆、頓馬、間拔ケノ類ダガ事實ダカラ仕方ガナイ、うそト思ヘバ二三日デモ僕ニ附キ隨フテ居タラ直グ分ル然シソシナ附キ馬ニナル醉狂人モナカラウガ附カレチャコツチモ面倒ダカラソレハヨシダガヨイ其レカラ又上ノ新聞ノ記事中心ハ「家庭的にも余り面白くない噂があるので」トアル、此面白クナイト云フ事



てりはよろひごけ (*Sticta platyphylla* Nyl.) ×1/1

(舊軒撮影)

ニ就テハ聊カ辯明シタイケレドワザト此ニハ省略シテ置ク  
ガ其レハ世間ニ公開シテモ少シモ耻カシクナイ事ダ  
右ノ新聞記事ハ多分地方ノ新聞ニモ載ツテ各地ノ友人知人  
ナドノ眼ニモ觸レタ事ト信ズルカラ誤解ヲ避ケンガ爲メニ  
此ニ其真相ヲ明ニシテ置ク事ハ私ノ爲メニハ頗ル必要ナ事  
ト思ヒ此クモ長々ト其顛末ヲ叙シタ次第デアル「蜃氣樓人  
さはがせしまぼろしも消えて痕なしもとの海山」

# ○舊 軒 獨 語 (其十八)

舊 軒 朝 比 奈 泰 彦

## ○よろひごけトてりはよろひごけ

よろひごけハ即 *Sticta Miyoshiana* Muell. Arg. ノ和名  
デアル吾國南北ヲ通ジテ産シ美シキ大形地衣ニ屬スル其大  
ナルモノハ徑二「デシ」ニ達シ殆ド圓形又ハ橢圓形ニ廣ガリ  
多數ノ瓣片ニ分裂シ裂片ノ先端ハ圓ルミアリテ僅ニ凹入セ  
リ表面ハ乾燥時ハ新シキモノニアリテハ淡灰綠色古クナル  
ト灰褐色ヲ呈シ短キ毛茸ヲ生ズルニヨリ滑カナラズ裂片ノ  
先端ハ往々褐色ヲ帶ブ裏面ハ殊ニ中央部ニ於テ黒褐色ノ長  
キ綿毛狀ノ毛茸生ジ所々ニ白色ノ盃點アリ主ニ樹皮上ニ着